



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

匂いの効果

私が香りに興味を持ち始めたのは、ゴンチチというギターデュオグループのチチ松村さんというアーティストに会ってからだ。今から15年くらい前だろうか。彼はその当時匂いに興味があつて、なんでも嗅いで、「これええ匂いちゃう？」と嬉しそうに言っていた。一度どこかの家の壁の匂いを嗅いで、

「臭い、今までに嗅いだことのない臭さや」

と言い出し、メモをとっていたのには呆れたが。

ま、だいたいキノコとか、クラゲ、桃などに凝ったりする不思議な人

なのだが、私は彼のそういうところが大好きだ。

で、匂い：香りというもの。なかなか深い世界なんである。日本人はあまり体臭がきつくないし、水の豊富な国なのでお風呂に入る習慣もあり、あまり香水を必須アイテムにはしないが、平安時代などには「香り」がたいへん盛んだった。

ま、衛生上の問題も多くあった時代だろうし、いい匂い＝身分の高い人、雅な人という構図もあったのだろう。貴族たちは自分のオリジナルのお香を着物に炊き染めて、香りを競ったという。お香を焚いて金属製のカゴを上にかぶせ、着物を掛けて香りを染みこませたらしい。みんな「マイカゴ」を持っていたとか、優雅というか、まったりした時代である。女も男もそうだったという話だ。

今、そんな平安時代の芝居を書いている。貴族社会に武家が入り始め、源平を代表とする一攫千金の時代。力のある者、才覚のある者が政治に

関わった時代でもある。男と生まれたからには、天上人になるのが夢だったというスタイリッシュな時代だ

私は今まで、歴史上の人物を脚本に書き込むのは避けてきたのだが、2004年にやった芝居に幕末に活躍した勤皇の志士をチラリと出したことがある。その反応が意外に大きく、芝居好きの観客の中にはやはり歴史好きが多いのだと改めて思った。

今回は「それやったら思い切り出すか」と開き直って、源頼朝が自分が天下人になるために歴史を操作するという話をベースにした。義経でさえも彼の策略で「弟」ということに途中からなった、という歴史を無視した時代劇である。書いて「ええんやろうか？」と思いつつ、芝居のなんでもありに乗って腹を括った。

そんな無謀な時代劇の中に登場するのが、香りの効果で人の気持ちまで操作してしまうという天才陰陽師キリタという少年だ。稽古場では今、香りについての勉強中である。舞台上で香りを残すわけにもいかないの、

そのへんも含めて暗中模索な毎日を送っている。平安時代には悪夢は災いの元と考えられていたらしく、それを収める効果のある香りさえ売られていたらしい。芝居の演出がスムーズにいく香りはないものだろうか。あ、今回の写真は我が家にあるお香立てだ。お地藏様がお香を持つような形になる、キュートな逸品である。雑誌で見つけて、わざわざ東京まで買いにいった品なので私の宝物だ。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
